

不登校生徒に関わる教師評価の問題

菊池 龍三郎*・安達 喜美子*・勝田 顕**・山口 豊一***
石川 悦子***・江幡 久美***・竹之内 美登里***

(1991年3月29日受理)

Some Problems of Teacher's Assessment of School Refusal Pupils

Ryuzaburo KIKUCHI, Kimiko ADACHI, Ken KATUTA, Toyokazu YAMAGUCHI,
Etuko ISHIKAWA, Kumi EBATA and Midori TAKENOUCHI

キーワード：登校拒否，自己評価チェックリスト，意味ある他者，社会的オジ

我々は、思春期心性に起因する不登校生徒について、次の2点を明らかにすることを目的とした。まず第一は、登校拒否児童・生徒を早期発見するためのチェックリストを開発すること、第二は、登校拒否の背景を把握することである。現代の子供は、核家族、生活の私化、個室化という状況が進行していると考えられる。そのことから、人と人とのつながりが弱くなったり、あるいは、失われていることが予想される。そこで、われわれは小中学生が、人と人とのつながりを求めているのではないかということに気づいた。そこで、登校拒否の背景を把握するに当たって、われわれは、小中学生の人的関わり（意味ある他者）に注目して調査を行った。調査は、小中学生に自分の自己評価と各自についていろいろな場面で意味ある人について答えてもらった。また、教師にも学校に適應していると思う子供5人、学校に不適應であると思う子供5人について評価してもらった。これらの調査から、中学校の教師は「適應生徒」の特徴を、学校、学習、運動が好きであり、健康で友人関係もうまくいって活発な性格であると把握していると考えられる。「不適應生徒」についてはそれらの特徴がかけられていると考えられる。また、同時に我々が開発したチェックリストの信頼性が確かめられた。

1. はじめに

近年、「登校拒否」が増加しているとか、深刻化しているとかというように、「登校拒否」という言葉は、児童・生徒が学校に行かない状況を指すときに、あるいはそれとの関連で現代の学校教

* 茨城大学教育学部、

** 茨城県関城町立関城中学校、

*** 茨城大学大学院教育学研究科

育の現場の問題状況を指すときに、広く使われる言葉となっている。まず、若干の概念・用語の説明をしておきたい。例えば、高垣は次のように定義している。「学校へ行きたいという気持ち、行こうとする確かな意志がありながら、学校へ行こうとすると身体的・精神的に拒否症状が現れる場合を『登校拒否』とよび、そうした登校拒否や怠学その他の事情によって学校へ行かない状態をすべて含んで『不登校』とよぶと、と一応区別することにします¹⁾」。

この定義においては「登校拒否」は「学校に行かない」という意味で「不登校」の一部であるが、精神的・身体的に拒否状況の強いものという理解の仕方である。

文部省の問題行動白書（1990）ではどうなっているか見てみると、1年間に50日以上欠席した長期欠席児童・生徒のうち「学校嫌い」をそのまま「登校拒否」と呼んでいる。そして原因別に類型化を試み「学校生活に起因する型」、「遊び非行型」、「無気力型」、「不安な情緒的混乱型」、「その他」の5つに分類している。そして小学生では、①不安な情緒的混乱型、②無気力型、③複合型の順に多く、中学校では、①無気力型、②不安などの情緒的混乱の型の順に多い。ここで注目されるのは、学校嫌いと登校拒否とを同義に使っていることである²⁾。

また、中野は、現在までの登校拒否児研究の成果をサーベイしつつ、登校拒否は第一に、神経症的な反応に分類され、怠休とは区別されること、第二に、分離不安症と学校恐怖症の二つが入ることという区分を行っている。（中野、1991）³⁾。

同時に中野は学校基本調査と問題行動白書の分析には、いくつかの問題点があることを指摘している。これは、今回の我々の調査研究においても重要な関わりを持つ問題であるので取り上げておきたい。中野の指摘する問題点の第一は、これまでの研究の流れからみて学校嫌いと登校拒否とを同義で使うことには問題があるということである。つまり学校嫌いから怠休を除外したものを登校拒否と呼んだ方がよいであろうということ。そして第二に、それぞれの型やタイプに分類するための統一基準と、分類の標準手続きが開発されていないことである。

われわれは、今回は、こうした「登校拒否」の概念の定義の仕方を基本的には踏襲したい。登校拒否と学校嫌いを区別すること、従って「不登校児童・生徒」から「学校嫌いの児童・生徒」を除いたものを基本的に登校拒否児童・生徒と呼ぶことにする。かつ分離不安や学校恐怖症の児童・生徒でもあるという前提で調査研究を進めたい。

登校拒否生徒の問題を扱うにあたり、まず、われわれは、登校拒否児童・生徒を発見するためのチェックリストの作成が必要であると考えた。

先にも述べたように登校拒否という用語・概念の取り扱いには十分に注意する必要がある、したがってチェックリストの開発・作成には慎重でなければならないことは言うまでもない。しかしわれわれの研究に加わった茨城県教育研修センターで登校拒否問題の研究・診断に関わってきた担当者や、実際に学校現場で登校拒否児童・生徒の指導に当たっている教師達との研究会を通して、われわれなりのチェックリストの作成に取り組む必要があるということになった。

ところで、このような問題を考えていく際に、誰を研究対象にするかという問題がある。言うまでもなく、登校拒否は中学生に最も多いとされている。しかし最近の傾向としては、小学生もかなりの勢いで増加しつつあることが報告されている。そこで小学生と中学生の両方を対象として研究調査を実施することにした。なお小学生は4年生以上、中学生は1、2、3年生について調査を実施することになった。

2. 不適應児チェックリストの作成

われわれのチェックリストは、次のような手順で作成された。まず、先行研究のサーベイを行い、登校拒否児童・生徒の症例や症状の検討を行い、特徴的と考えられる症例・症状の抽出と整理を行った。次にこれまでにわれわれが関わってきた登校拒否児童・生徒の諸特徴を分析し、先行研究サーベイにおいて取り出した若干の領域に分類・整理した。次にこれをもとに児童・生徒の不適應傾向自己評価用チェックリスト（以下、生徒の自己評価チェックリストと呼ぶ）を作成した。さらに教師の児童・生徒に対する不適應傾向評価用チェックリスト（以下これを教師評価チェックリストと呼ぶ）を作成した。

予備調査において、これらのチェックリストで、教師用では生徒を、「当てはまる」、「わからない」、「当てはまらない」の3段階評定で、生徒には、自分のことについて、「はい」、「いいえ」の2段階で評価してもらった。教師評価の場合、クラスごとにクラス担任に登校拒否傾向があると思われる生徒を5人、学校にイキイキと適應していると思われる生徒5人を選んでその生徒について評価してもらうという方法をとった。

調査対象は、茨城県内公立中学校、男子227人、女子226人、計453人(教師が評価した生徒は、このうち男子23人、女子32人、計55人である)。

まず、我々は、項目の妥当性を検討するために、生徒の自己評価のチェックリストについて、G-P分析を行なった。その結果、25項目中22項目において妥当性が認められた。

また、教師用のチェックリストについては、学校にいきいきと「適應している」、「不適應である」として教師に選ばれた生徒が、教師の評価において差があるかどうかを検討した。その結果、22項目中15項目で有意な差が見られた。教師は、これらの項目で生徒を適應生徒、不適應生徒と区別していると考えてよいであろう。次に、教師の評価と生徒の自己評価とでどのくらい一致がみられるかを調べるために、全体的に両者の間に一致の傾向が見られたがとくに教師が選んだ適應生徒、不適應生徒の間で生徒の自己評価得点を比較した。

その結果、「8. 朝ごはんを食べないことがよくある」、「10. ちょっとぐあいが悪いと出かけない」、「22. 友達と遊ぶよりはお母さんといっしょにいるほうが好きだ」の3項目において教師評価と生徒の自己評価の間に高い一致が見られている。

そこで、これらの結果にしたがってチェックリストを修正し、本調査を行った。

また、同時に、登校拒否児の人的なつながりを明らかとするために、人的関わりの調査を実施した。その際、我々が以前、開発した人的関わりの調査表(意味ある他者)⁴⁾を用いた。ただし、小学生に対しては判断に困難を来すような難解な項目を平易な表現に変えたり、項目数を減すなどの修正を加えた。中学生に対しては、そのまま用いた。

調査は、茨城県内公立小学生のうち男子382名、女子332名、計714名、茨城県内公立中学生のうち男子352名、女子328名、計680名を対象に行った。

さらに、小学校172名、中学校207名について教師に自分の担任するクラスの子供の内から各10名ずつについて評価してもらった。

3. 結果と考察

3-1 登校拒否児童・生徒に対する教師の評価について

1) 小学校児童についての教師評価の結果

小学校の結果は、表1である。小学校の担任教師が「不適応児童」とみなしている児童が「よくあてはまる」と判断した割合の多いのは次の6項目で、項目4「友達が少ない」(62.4%)、項目5「食べ物に好き嫌いがある」(40.2%)、項目7「運動を好まない」(41.2%)、項目12「何でも意欲的にとりくまない」(67.7%)、項目13「活気がない」(44.1%)、項目15「こらえ性がない」(49.5%)であった。この結果からみると、小学校の担任教師は、このような友人関係とその児童の性格に関わる項目を「不適応児童」の特徴あるいはこれを見極める観点としていることが分かる。

また逆に、次の7つの項目は「よくあてはまる」の割合が低かったのである。つまり、項目1「遅刻が多い」(14.7%)、項目2「学校が好きでない」(17.6%)、項目6「頭痛や腹痛で保健室へいく」(14.7%)、項目14「物事の細かいことまで気にかける」(11.8%)、項目16「父が厳格である」(12.7%)、項目18「父は無関心である」(14.7%)、項目21「父や母は子供を理想の姿でとらえている」(17.8%)、項目22「母はよく人を批判する」(11.0%)は低い割合となっている。このことから、小学校の担任教師は、上記のような項目を「不適応児童」の特徴とはみていないことが分かる。つまり、遅刻や学校嫌い、家庭の環境は余り関わりがないとみているのである。遅刻や学校嫌いが余り関係がないとみていることは、一般的に考えて不自然な感がある。

児童の欠席と遅刻、早退で「適応児童」と「不適応児童」とを比較すると、4月から12月における欠席は前者が平均0.6日に対して、後者は平均7.7日であり、遅刻は前者は平均0.1日に対して後者1.0日となっており、早退においては前者0.3日、後者1.2日となっている。結局、当然のことではあるが、「不適応児童」の欠席、遅刻、早退いずれも「適応児童」よりも多くなっている。

表2は、適応生徒と不適応生徒の教師評価の検定の結果である。項目20「母は意見を強く主張する」と項目21「父や母は子供を理想の姿でとらえている」との2項目以外は、すべて有意差が認められた。

2) 中学校生徒についての教師評価

中学校の結果(表3)については、中学校の教師が「不適応生徒」とみている生徒に対して、教師が「よくあてはまる」と判断している項目は、次の6項目が主なものである。すなわち、項目1「遅刻が多い」(33.7%)、項目4「友達が少ない」(35.1%)、項目5「食べものの好き嫌いがある」(30.5%)、項目9「ひどく嫌いな教科がある」(33.0%)、項目12「何でも意欲的にとりくまない」(47.4%)、項目13「活気がない」(41.1%)、項目15「こらえ性がない」(31.6%)は、高い割合を示している。したがって、中学校の教師は、このような学校生活に関すること(遅刻が多い)と生徒の性格に関わる項目を「不適応生徒」の特徴、あるいは見極めの観点としていることが分かる。

また逆に、次の10項目は「よくあてはまる」の割合が低かった。すなわち、項目3「友達から嫌

菊池ほか：不登校生徒に関する教師評価の問題

表1 児童に対する教師評価

項目	教師評価					
	あてはまらない	わからない	あてはまる	あてはまらない	わからない	あてはまる
1 遅刻が多い	104(99.0%)	1(1.0%)	0(0.0%)	84(82.4%)	3(2.9%)	15(14.7%)
2 学校が好きでない	99(94.3%)	5(4.8%)	1(1.0%)	67(65.7%)	17(16.7%)	18(17.6%)
3 友達から嫌われている	98(93.3%)	4(3.8%)	3(2.9%)	66(64.7%)	4(3.9%)	32(31.4%)
4 友達が少ない	99(94.3%)	1(1.0%)	5(4.8%)	35(34.7%)	3(3.0%)	63(62.4%)
5 食べ物好き嫌いある	80(76.9%)	7(6.7%)	17(16.3%)	53(52.0%)	8(7.8%)	41(40.2%)
6 頭痛、腹痛で保健室	104(99.0%)	0(0.0%)	1(1.0%)	85(83.3%)	2(2.0%)	15(14.7%)
7 運動を好まない	96(91.4%)	4(3.8%)	5(4.8%)	54(52.9%)	6(5.9%)	42(41.2%)
8 勉強が嫌い	97(92.4%)	6(5.7%)	2(1.9%)	57(54.3%)	6(5.7%)	42(42.0%)
9 ひどく嫌いな教科ある	94(89.5%)	5(4.8%)	6(5.7%)	50(49.5%)	11(10.9%)	40(39.6%)
10 朝身体が不調	101(96.2%)	2(1.9%)	2(1.9%)	73(71.6%)	8(7.8%)	21(20.6%)
11 自分勝手	94(89.5%)	7(6.7%)	4(3.8%)	59(57.8%)	9(8.8%)	34(33.3%)
12 意図的	60(57.1%)	14(13.3%)	31(29.8%)	16(15.7%)	17(16.7%)	69(67.7%)
13 活気がない	92(87.6%)	5(4.8%)	8(7.6%)	46(45.1%)	11(10.8%)	45(44.1%)
14 物事細かい	73(69.5%)	16(15.2%)	16(15.2%)	86(84.3%)	4(3.9%)	12(11.8%)
15 こらえ性がない	89(84.8%)	12(11.4%)	4(3.8%)	42(41.2%)	10(9.8%)	50(49.0%)
16 父が厳格である	70(66.7%)	34(32.4%)	1(1.0%)	53(52.0%)	36(35.3%)	13(12.7%)
17 母は世話好き	73(70.2%)	22(21.2%)	9(8.7%)	50(50.0%)	16(16.6%)	34(34.0%)
18 父は無関心である	69(66.3%)	34(32.7%)	1(1.0%)	46(45.1%)	41(40.2%)	15(14.7%)
19 父や母は要求的	64(61.0%)	33(31.4%)	8(7.6%)	40(39.6%)	36(38.6%)	22(21.8%)
20 母は意見を主張する	69(65.7%)	22(21.0%)	14(13.3%)	53(53.0%)	24(24.0%)	23(23.0%)
21 父母は子供を理想化	53(50.5%)	39(37.1%)	13(12.4%)	47(46.5%)	36(35.6%)	18(17.8%)
22 母は人を批判する	83(79.0%)	22(21.0%)	0(0.0%)	61(61.0%)	28(28.0%)	11(11.0%)

表2 小学校教師評価の妥当性

項目	カイ自乗値	有意差判定	
1 遅刻が多い	18.09	[***]	[***] P<.001
2 学校が好きでない	27.89	[***]	[**] P<.01
3 友達から嫌われている	30.24	[***]	[**] P<.05
4 友達が少ない	80.99	[***]	[**] P<.05
5 食べ物好き嫌いある	15.46	[***]	
6 頭痛、腹痛で保健室	16.12	[***]	
7 運動を好まない	41.25	[***]	
8 勉強が嫌い	39.40	[***]	
9 ひどく嫌いな教科ある	40.76	[***]	
10 朝身体が不調	23.76	[***]	
11 自分勝手	31.90	[***]	
12 意図的	40.17	[***]	
13 活気がない	43.38	[***]	
14 物事細かい	8.79	[*]	
15 こらえ性がない	56.20	[***]	
16 父が厳格である	12.65	[**]	
17 母は世話好き	19.71	[***]	
18 父は無関心である	17.49	[***]	
19 父や母は要求的	12.50	[**]	
20 母は意見を主張する	4.26	[]	
21 父母は子供を理想化	1.21	[]	
22 母は人を批判する	14.97	[***]	

われている」(12.6%)、項目6「頭痛や腹痛で保健室へいく」(15.8%)、項目11「自分勝手に他人を考えない」(17.9%)、項目14「物事の細かいことまで気にかける」(7.4%)、項目16「父は厳格である」(4.6%)、項目18「父は無関心である」(10.2%)、項目19「父や母は要求的である」(4.3%)、項目20「母は意見を強く主張する」(18.3%)、項目21「父や母は子供を理想の姿でとらえる」(4.3%)、項目22「母はよく人を批判する」(7.5%)は低い割合になっている。このことから、中学校の教師は、上記のような項目を「不適応生徒」の特徴としてみていないことが分かる。「親のこと」については、ほとんど関係がないとみているのであるが、項目17「母は世話好きである」の「よくあてはまる」の割合が、22.6%とほかにくらべて高くなっていたり、前述の項目20の割合が18.3%とやや高かったりするのは注目される。登校拒否には、主に分離不安性(separation anxiety disorder)と学校恐怖症(school phobia)の2つが入ると報告されているが³⁾前者のケースの一部に「母親からの自立」があると考えられる。

次に、中学校の教師が「適応生徒」とみなしている生徒に「よくあてはまらない」と判断している項目、つまり前述のようにこれらの項目から学校によく適応していないと判断しているのは、項目1「遅刻が多い」(97.9%)、項目2「学校が好きでない」(96.8%)、項目3「友達から嫌われている」(94.7%)、項目4「友達が少ない」(96.8%)、項目6「頭痛や腹痛で保健室へいく」(100.0%)、項目7「運動を好まない」(96.8%)、項目8「勉強が嫌いだ」(96.8%)、項目10「朝身体の不調を訴える」(98.9%)、項目11「自分勝手に他人をかながえない」(94.7%)、項目13「活気がない」(90.5%)の10項目である。このことから、この10項目は「適応生徒」の特徴としてみていないのである。従って、中学校の教師は「適応生徒」の特徴を、学校、学習、運動が好きであり、健康で友人関係がうまくいっていて、さらに加えて他人を考え、活発な性格であることと把握していると考えられる。前述の「不適応生徒」の特徴との関連からすると、項目1「遅刻が

表3 中学校生徒に対する教師評価

項目	教師評価			適 応			不 適 応		
	あてはまらない	わからない	あてはまる	あてはまらない	わからない	あてはまる	あてはまらない	わからない	あてはまる
1 遅刻が多い	93(97.7%)	0(0%)	2(2.1%)	63(66.3%)	0(0%)	32(33.7%)			
2 学校が好きでない	92(96.8%)	0(0%)	3(3.2%)	54(56.8%)	20(21.1%)	21(22.1%)			
3 友達から嫌われている	90(94.7%)	4(4.2%)	1(1.1%)	72(75.8%)	11(11.6%)	12(12.6%)			
4 友達が少ない	92(96.8%)	2(2.1%)	1(1.1%)	55(58.5%)	6(6.4%)	33(35.1%)			
5 食べ物好き嫌いある	77(81.1%)	6(6.3%)	12(12.6%)	41(43.2%)	25(26.3%)	29(30.5%)			
6 頭痛、腹痛で保健室	95(100.0%)	0(0%)	0(0%)	77(81.1%)	3(3.2%)	15(15.8%)			
7 運動を好まない	92(96.8%)	0(0%)	3(3.2%)	57(60.6%)	10(10.6%)	27(28.7%)			
8 勉強が嫌い	92(96.8%)	1(1.1%)	2(2.1%)	51(54.3%)	15(16.0%)	28(29.8%)			
9 ひどく嫌いな教科ある	80(84.2%)	4(4.2%)	11(11.6%)	51(54.3%)	12(12.8%)	31(33.0%)			
10 朝身体が不調	94(98.9%)	0(0%)	1(1.1%)	60(63.2%)	4(4.2%)	31(32.6%)			
11 自分勝手	90(94.7%)	2(2.1%)	3(3.2%)	71(74.7%)	7(7.4%)	17(17.9%)			
12 意欲的	66(69.5%)	15(15.8%)	14(14.7%)	30(31.6%)	20(21.1%)	45(47.4%)			
13 活気がない	86(90.5%)	4(4.2%)	5(5.3%)	44(46.3%)	12(12.6%)	39(41.1%)			
14 物事細かい	69(73.4%)	17(18.1%)	8(8.5%)	71(74.7%)	7(7.4%)	7(7.4%)			
15 こらえ性がない	84(88.4%)	10(10.5%)	1(1.1%)	44(46.3%)	21(22.1%)	30(31.6%)			
16 父が厳格である	59(64.1%)	31(33.7%)	2(2.2%)	41(47.1%)	42(48.3%)	4(4.6%)			
17 母は世話好き	67(70.5%)	25(26.3%)	3(3.2%)	52(55.9%)	20(21.5%)	21(22.6%)			
18 父は無関心である	63(67.7%)	26(28.0%)	4(4.3%)	39(44.3%)	40(45.5%)	9(10.2%)			
19 父や母は要求的	61(64.2%)	30(31.6%)	4(4.2%)	50(54.3%)	38(41.3%)	4(4.3%)			
20 母は意見を主張する	62(65.3%)	31(32.6%)	2(2.1%)	50(53.8%)	26(28.0%)	17(18.3%)			
21 父や母は子供を理想化	47(49.5%)	42(44.2%)	6(6.3%)	46(48.9%)	44(46.8%)	4(4.3%)			
22 母は人を批判する	65(68.4%)	28(29.5%)	2(2.1%)	47(50.5%)	39(41.9%)	7(7.5%)			

表4 中学校教師評価の妥当性

項 目	カイ自乗値	有意差判定	
1 遅刻が多い	3.50	[[]]	[**]
2 学校が好きでない	28.27	[**]	P < .001
3 友達から嫌われている	4.60	[*]	[**]
4 友達が少ない	4.49	[*]	P < .01
5 食べ物好き嫌いある	20.96	[**]	[*]
6 頭痛、腹痛で保健室	3.62	[[]]	P < .05
7 運動を好まない	14.65	[**]	
8 勉強が嫌い	20.00	[**]	
9 ひどく嫌いな教科ある	7.57	[**]	
10 朝身体が不調	6.03	[*]	
11 自分勝手	3.89	[*]	
12 意欲的	7.29	[**]	
13 活気がない	10.20	[**]	
14 物事細かい	0.01	[[]]	
15 こらえ性がない	11.50	[**]	
16 父が厳格である	4.62	[*]	
17 母は世話好き	0.01	[[]]	
18 父は無関心である	8.05	[**]	
19 父や母は要求的	1.98	[[]]	
20 母は意見を主張する	0.01	[[]]	
21 父や母は子供を理想化	0.05	[[]]	
22 母は人を批判する	4.43	[*]	

多い」と項目4「友達が少ない」、項目13「活気がない」において一致しており、中学校の教師は「適応生徒」と「不適応生徒」との違いは、遅刻と友人関係、活動性において顕著であると考えられる。

生徒の欠席、遅刻、早退に関して「適応生徒」と「不適応生徒」との比較をすると、4月から12月においての欠席は前者が平均0.1日に対して、後者は平均12.1日であり、遅刻は前者は平均0日に対して後者は3.1日となっており、早退においては前者0日、後者1.9日となっている。結局、当然ではあるが、「不適応生徒」の欠席、遅刻、早退いずれにおいても「適応生徒」よりも多くなっている。

表4は、適応者と不適応者の教師評価の検定の結果で、項目6「頭痛や腹痛で保健室へいく」、項目14「物事の細かいことめで気にかける」、項目17「母は世話好きである」、項目19「父や母は要求的である」、項目20「母は意見を強く主張する」、項目21「父や母は子供を理想の姿でとらえている」の6項目以外は有意であり、関連性があることがわかった。

3) 小・中学校児童・生徒の比較

小学校の結果と中学校の結果とを比較してみる。まず、小学校と中学校の教師が「不適応児童・生徒」であるとみている児童・生徒に「よくあてはまる」と判断している項目について比較すると、項目4「友達が少ない」、項目5「食べ物に好き嫌いがある」、項目12「何でも意欲的に取り組まない」、項目13「活気がない」、項目15「こらえ性がない」の5つの項目において、小学校と中学校の教師のあげている項目が一致する。この項目のほかに、小学校では項目7「運動好まない」、中学校においては項目1「遅刻が多い」と項目9「ひどく嫌いな教科がある」の項目がプラスされる。この結果からすると、小学校の教師と中学校の教師とが「不適応児童・生徒」の特徴として捉えて

菊池ほか：不登校生徒に関する教師評価の問題

いる観点はほぼ同一であることと、中学校において「遅刻が多い」「ひどく嫌いな教科がある」などの「学校生活での影響」がプラスされていることは、問題行動白書（文部省、1990²⁾の報告、すなわち「登校拒否に陥った直接の原因は、小学校では家庭生活での影響、中学校では学校生活の影響が多くなっている」と一致するのである。

次に、「不適応児童・生徒」に「よくあてはまらない」と判断している項目について比較すると、項目6「頭痛や腹痛で保健室へいく」、項目14「物事の細かいことまで気にかける」項目16「父は厳格である」、項目18「父は無関心である」、21「父や母は子供を理想の姿でとらえている」項目22「母はよく人を批判する」の6項目において小・中学校教師のあげている項目が一致する。さらに、小学校には項目1「遅刻が多い」、項目2「学校がすきでない」が、中学校は項目3「友達から嫌われている」、項目19「父や母は要求的である」、項目20「母は意見を強く主張する」の項目が加わる。この結果から、小学校の教師は遅刻や学校がすきでないなどの「学校生活への否定的意識」や、「父や母のあり方」を必ずしも「不適応児童」の特徴と考えてはいないことが分かり、前述の問題行動白書の報告においては「家庭生活の影響」がクローズアップされていることとの関連については、さらに検討する必要がある。中学校において、遅刻や学校が好きでない、などの項目はあげられていないものの、項目3「友達から嫌われている」を「不適応生徒」の特徴として捉えていることは、「学校生活の影響」が多くなっているという観点からすると、友人関係が学校生活の一部となっており、その問題なのではないかと考えられる。

最後に、欠席、遅刻、早退については、中学校においてやや欠席が多くなるが、遅刻や早退においては目だった差は、小学校においても中学校においても認められなかった。

表5 児童の自己評価と教師評価

項目	教師評価		適 応		不 適 応	
	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ
1 学校へいきたくない	51(49.5%)	52(50.5%)	69(73.4%)	25(26.6%)		
2 学校がきらいではない	8(7.8%)	94(92.2%)	20(21.3%)	74(78.7%)		
3 友達からきられていない	5(5.0%)	96(95.0%)	25(26.9%)	68(73.1%)		
4 学校の友達がすきくない	2(1.9%)	101(98.1%)	21(22.3%)	73(77.7%)		
5 外で遊んで服を汚すことが嫌だ	38(37.3%)	64(62.7%)	35(37.2%)	59(62.8%)		
6 外へ遊びいってもすく帰ってくるほうだ	15(14.6%)	88(85.4%)	27(29.0%)	66(71.0%)		
7 食べ物に好き嫌いがあ	83(81.4%)	19(18.6%)	55(59.1%)	38(40.9%)		
8 朝ごはんを食べない	14(13.6%)	89(86.4%)	15(16.0%)	79(84.0%)		
9 頭、腹が痛い	3(2.9%)	100(97.1%)	10(11.2%)	79(88.8%)		
10 ちょっと具合が悪いと出掛けない	10(9.9%)	91(90.1%)	24(25.5%)	70(74.5%)		
11 勉強が好きだ	74(71.8%)	29(28.2%)	74(78.7%)	20(21.3%)		
12 とても嫌いな教科がある	51(49.5%)	52(50.5%)	65(69.1%)	29(30.9%)		
13 朝起きるのがつらい	68(66.0%)	35(34.0%)	61(64.9%)	33(35.1%)		
14 他人のことを考えなくて済むことが多い	30(29.7%)	71(70.3%)	36(38.3%)	58(61.7%)		
15 なんでも他人にたよる	33(32.0%)	70(68.0%)	44(46.8%)	50(53.2%)		
16 心配なことがある	51(49.5%)	52(50.5%)	53(56.4%)	41(43.6%)		
17 ちょっとしたことにも気になる	47(46.1%)	55(53.9%)	57(60.6%)	37(39.4%)		
18 何かを決めることができない	66(64.1%)	37(35.9%)	65(69.1%)	29(30.9%)		
19 欲しいものはかってもらえる	12(12.0%)	88(88.0%)	19(20.2%)	75(79.8%)		
20 友達よりお母さんといたい	6(5.8%)	97(94.2%)	11(11.8%)	82(88.2%)		
21 朝起こしてもらわないと起きられない	29(28.2%)	74(71.8%)	35(37.6%)	58(62.4%)		
22 お父さんにしかられたことがない	2(2.0%)	100(98.0%)	8(8.6%)	85(91.4%)		

表6 小学校教師評価と児童評価の関連性

項 目	カイ自乗値	有意差判定	
1 学校へ行きたくない	11.78	[***]	[***] P<.001
2 学校が嫌ではない	7.21	[**]	[**] P<.01
3 友達から嫌われていない	17.81	[***]	[**] P<.05
4 学校の友達が少ない	19.83	[***]	[*]
5 外で遊んで服を汚すことが嫌だ	0.00	[]	
6 外へ遊びいってもすく帰ってくるほうだ	6.08	[*]	
7 食べ物に好き嫌いがあ	11.62	[**]	
8 朝ごはんを食べない	0.22	[]	
9 頭、腹が痛い	4.76	[*]	
10 ちょっと具合が悪いとでかけない	8.26	[**]	
11 勉強が好きだ	1.24	[]	
12 とても嫌いな教科がある	7.83	[**]	
13 朝起きるのがつらい	0.03	[]	
14 他人のことを考えなくて済むことが多い	1.61	[]	
15 なんでも他人にたよる	4.50	[*]	
16 心配なことがある	0.93	[]	
17 ちょっとしたことにも気になる	4.16	[*]	
18 何かを決めることができない	0.57	[]	
19 欲しいものは買ってもらえる	2.43	[]	
20 友達よりお母さんといたい	2.22	[]	
21 朝起こしてもらわないと起きられない	2.00	[]	
22 お父さんにしかられたことがない	4.41	[*]	

3-2 登校拒否児童・生徒の自己評価と教師の評価

1) 小学校の結果と考察

小学校の結果は、表5である。小学校の教師が「不適応児童」と考えている児童が「はい」と答えている割合の高い項目は、項目1「学校へ行きたくないときがある」(73.4%)、項目2「学校が嫌いである」(78.7%)項目3「友達から嫌われている」(73.1%)であった。すなわち、前述の観点からすると「学校生活への否定的意識」によるものだけであった。しかし、項目2と項目3においては「適応児童」が「はい」と答えている割合が、前者92.2%、後者95.0%となっており、この項目が逆転項目であるため児童の読み違いが予想される。項目1については「適応児童」と「不適応児童」に差がみとめられる。

そこで、「適応児童」と「不適応児童」とで、「はい」と答えた児童の割合の「差」をみることによって、児童自身による自己評価と教師の評価(適応児、不適応児という評価)との関係を明確にするために、各項目においてこの二者の「差」(「はい」)をみると(表6)、項目1「学校へいきたくないときがある」(23.9%)が一番多く、項目4「学校の友達が少ない」(20.4%)、項目13「とても嫌いな教科がある」(19.6%)、項目10「ちょっと具合が悪いと出かけない」(15.6%)、項目16「なんでも他の人にたよりがちである」(14.8%)の順である。すなわち、「学校生活」と「本人に関わる問題(性格など)」が、児童自身の自己評価と教師の評価とで、一致する項目であると言える。前述の『登校拒否児童・生徒に対する教師の評価』の箇所では、小学校の教師が「遅刻や学校嫌い」を「不適応児童」の特徴として把握していないことを述べたが、児童自身の自己評価との関わりからすると、学校生活に関する項目は極めて関連性が強いという結果であり、「教師の目」のずれを指摘せざるをえない。

児童の評価と教師評価の関連について検定を行った結果は、表6の通りである。

2) 中学校の結果と考察

中学校の教師が「不適応生徒」と考えている生徒が「はい」と答えている割合の高い項目は、表7から項目1「学校へいきたくないときがある」(72.8%)、項目2「学校が嫌いである」(71.6%)、項目3「友達から嫌われている」(73.1%)で、「学校生活」に関するものだけであるが、項目2、3においては「適応生徒」も同様に高い割合を示して(94.4%、87.4%)おり、小学校同様逆転項目のための読み違いということも予想されるが、項目1については「適応生徒」「不適応生徒」との「差」が認められる。

そこで、教師が「適応生徒」と「不適応生徒」とみなした両者間で、「はい」という反応の割合の「差」を調べることによって、生徒自身による自己評価と教師評価との関係を明確にする。各項目において、この二者の「差」(「はい」)をみると、項目23「朝おこしてもらわないとおきられない」(27.7%)、項目13「とても嫌いな教科がある」(25.0%)、項目1「学校へいきたくないときがある」(24.5%)、項目8「朝ごはんを食べないことがある」(16.4%)、項目5「外で遊んで服をよごすのがいやだ」(16.3%)の順である。すなわち、「学校生活」と「家庭生活」、「本人に関わる問題(性格など)」が、生徒自身の自己評価と教師の評価とで、一致する項目であると言える。

菊池ほか：不登校生徒に関する教師評価の問題

表7 中学校生徒の自己評価と教師評価

項目	教師評価		自己評価	
	適 応	不 適 応	は い	いいえ
1 学校へいきたくない	43(48.3%)	46(51.7%)	59(72.8%)	22(27.2%)
2 学校がきらいではない	5(5.6%)	85(94.4%)	23(28.4%)	58(71.6%)
3 友達からきられていない	11(12.6%)	76(87.4%)	21(26.9%)	57(73.1%)
4 学校の友達がすくない	5(5.7%)	83(94.3%)	16(20.0%)	64(80.0%)
5 外で遊んで服を汚すことが嫌だ	27(30.0%)	63(70.0%)	37(46.3%)	43(53.8%)
6 外で遊び回ってもすぐ帰ってくるほうだ	27(30.0%)	63(70.0%)	14(17.1%)	68(82.9%)
7 食べ物に好き嫌いがあ	49(54.4%)	41(45.6%)	40(49.4%)	41(50.6%)
8 朝ごはんを食べない	5(5.6%)	85(94.4%)	18(22.0%)	64(78.0%)
9 頭、服が痛い	0(0%)	90(100.0%)	11(13.4%)	71(86.6%)
10 ちょっと具合が悪いと出掛けない	7(8.0%)	81(92.0%)	17(20.7%)	65(79.3%)
11 勉強が好きだ	70(80.5%)	17(19.5%)	68(84.0%)	13(16.0%)
12 とても嫌いな教科がある	39(43.3%)	51(56.7%)	56(68.3%)	26(31.7%)
13 朝起きるのがつらい	52(57.8%)	38(42.2%)	53(64.6%)	29(35.4%)
14 他人のことを考えなくて済むことが多い	29(32.6%)	60(67.4%)	33(41.8%)	46(58.2%)
15 なんでも他人にたよる	39(44.3%)	49(55.7%)	47(58.8%)	33(41.3%)
16 心配なことがある	42(47.7%)	46(52.3%)	50(61.7%)	31(38.3%)
17 ちょっとしたことにも気になる	48(53.3%)	42(46.7%)	48(58.5%)	34(41.5%)
18 何かを決めることができない	52(58.4%)	37(41.6%)	44(54.3%)	37(45.7%)
19 欲しいものはかってもらえる	20(22.2%)	70(77.8%)	19(23.2%)	63(76.8%)
20 友達よりお母さんといいたい	4(4.4%)	86(95.5%)	7(8.6%)	74(91.4%)
21 朝起してもらわないと起きられない	19(21.1%)	71(78.9%)	39(48.8%)	41(51.3%)
22 お父さんにしかられたこといらない	4(4.5%)	85(95.5%)	5(6.3%)	75(93.8%)

表8 中学校教師評価と生徒評価の関連性

項 目	カイ自乗値	有意差判定
1 学校へ行きたくない	10.63	[**]
2 学校が嫌いではない	16.24	[***]
3 友達から嫌われていない	5.36	[*]
4 学校の友達が少ない	7.85	[**]
5 外で遊んで服を汚すことが嫌だ	4.76	[*]
6 外で遊び回ってもすぐ帰ってくるほうだ	3.95	[*]
7 食べ物に好き嫌いがあ	0.44	[]
8 朝ごはんを食べない	9.96	[**]
9 頭、服が痛い	12.90	[***]
10 ちょっと具合が悪いとでかけない	5.72	[*]
11 勉強が好きだ	0.35	[]
12 とても嫌いな教科がある	10.81	[**]
13 朝起きるのがつらい	0.85	[]
14 他人のことを考えなくて済むことが多い	1.52	[]
15 なんでも他人にたよる	3.49	[*]
16 心配なことがある	3.33	[]
17 ちょっとしたことにも気になる	0.47	[*]
18 何かを決めることができない	0.29	[]
19 欲しいものは買ってもらえる	0.02	[]
20 友達よりお母さんといいたい	1.25	[]
21 朝起してもらわないと起きられない	14.39	[***]
22 お父さんにしかられたことがない	0.26	[]

[***]
P < .001
[**]
P < .01
[*]
P < .05

生徒の自己評価と教師の評価の関連性について検定を行った結果は、表8の通りである。

項目1, 2, 3, 4, 5, 6, 8, 9, 10, 12, 22の11項目について有意であり、これらの項目においては生徒の自己評価と教師の評価との関連が強いことが言える。

3) 小学校と中学校の結果の比較と考察

「適応児童・生徒」と「不適応児童・生徒」とで、各項目における「はい」と答えた児童・生徒の割合の「差」を調べた結果、前述のように小学校においては「学校生活」に関わる項目と、それに「本人の問題(性格など)」の項目において「差」が大きかった。だが、中学校においては「家庭生活」、「学校生活」、「本人の問題」に関わる項目が、「差」の大きい項目であった。前述の問題行動白書(文部省, 1990)の報告では、登校拒否に陥る原因は小学校では「家庭生活の影響」が多く、中学校においては「学校生活の影響」が大きいとされているが、本調査の結果は、ある面では問題行動白書の報告と一致するが、小学校において「学校生活への否定的意識」が上位を示しており、登校拒否の「低年齢化」が進んでいるのではないかと考えられる。

児童・生徒の自己評価と教師評価の関連性検定において、前述のように小学校で12項目、中学校で11項目で有意差が認められたが、項目の内容は小学校、中学校ほぼ同一であった(表9)。このことから、小学校の教師と中学校の教師とが、登校拒否傾向を捉える際に、ほぼ同様の観点で児童・生徒を評価していると言える。

3-3 人的関わりについて

思春期は対人関係が生活空間や意識空間の拡がりにもなって、それまでの家庭を中心とした大

人との密着した関係が重要な意味を持つという在り方から、友達など家庭外の人々との親密な関係が重要な意味を持つ在り方へと変化していく。この時期、彼らが学校生活で教師や友達との人間的な関わりが適切に持てないなどの状況に陥ることは彼らを心理的な空白状況に追いやる。

登校拒否に陥る子供達はこのような対人関係の移行が順調に行われていないのではないかと、同時に彼らは自我の発達においてさまざまな影響を受ける人々（一般に、それらの人々は意味ある他者、あるいは重要な他者 significant others と呼ばれている）との適切な関わりが持てないのではないかと。その意味では彼らはその生活のなかで重要な人との心理的關係が断たれているので心理的空白の状態にあり、その空白を埋めるために直接的な人的関係のような自己努力や自己抑制などを必要としないメディアを通しての関わりという、非日常的関わりに逃避する傾向があるのではないかと考えられる。

そこで、かつてわれわれが開発した意味ある他者測定テスト⁴⁾を用いて、かれらの人的関わりの様相を調査した。そのテストは以下に述べるように人との関わり方の4つの意味が因子分析によって抽出されている。つまり、われわれは人との関わり方のなかで、その人を手本にしたり、見習ったりあるいは目標としたりすることを通じて自己成長をはかる（第一因子＝人生示範因子）、その人に頼ったり、依存したりして自己の安定をはかることを通じて自己成長が見られる（第二因子＝宿り木または依存因子）のであり、またその人を同一視したり、その人との関わりがあることが自己拡大につながるという意味を持つ（第三因子＝虎の威因子）、その人となら人生を共にできるとかその人のためになれると思うことによって自己の存在意義が確認できるという意味（第四因子＝共生または道行きの因子）の関わりを通じて自己の成長をはかっている。

このような人との関わりを測定することを目的とした調査を実施しその結果から、どのような人とどのような意味の関わりを持てているかをさぐる。

①人生示範的意味

小学生期においては一般に考えられている以上に地域の人々との関わりを意識していることがわ

表9 「適応」・「不適応」児童・生徒の反応の差上位5位までの項目

小 学 校		中 学 校	
1	学校へ行きたくない時がある (23.9%)	1	朝おこしてもらわないとおきられない (27.7%)
2	学校の友だちが少ない (20.4%)	2	とても嫌いな教科がある (25.0%)
3	とても嫌いな教科がある (19.6%)	3	学校へ行きたくない時がある (24.5%)
4	ちょっとしたことにも気になる (15.6%)	4	朝ごはんを食べないことがある (16.4%)
5	何でも他の人に頼りがちである (14.8%)	5	外であそんで服を汚すのが嫌だ (16.3%)

かる。家庭における父や母への関わり以上に地域の人への関わりの意味を意識している。中学生期では家庭における父や母への関わりが小学生期より増加する一方で、友達や学校の先生への関わりの意味が激増している。このことは中学生になると親子関係における承認よりも、家庭の外の人々による承認をより重要なものと考えようになっていくことを示している。また中学生ではあまりみられない祖父母との関わり（2.0%）が小学生ではかなり見られ（13.4%）ており、この時期、家庭において祖父母が大きな役割を果たしていることがわかる。しかし、これも子供が中学生になるとその役割が減少する。さらにこの意味において、メディアの人々が大きな割合を占めていることは特徴的である。メディアを通して現われる人々が彼らの憧れの対象になっている。メディア時代の子供達の大きな一つの特徴といえよう。不応適生徒では、この意味において父、母、先生との関わりが希薄化していることがわかった。

②依存（宿り木）的意味

この関わりの意味はその人に頼ったり、依存したりすることを通して心理的安定をはかるといふものである。われわれは何か困ったことや困難な場面に直面したとき、誰か頼りになる人がいるという安心感によって物事に積極的に取り組めるし、勇気がでるのである。

この意味で選ばれたのは、小学生も中学生もいま自分が所属している学校の友達ももっとも多く（小学生は小学校の友達40.6%、中学生は中学校の友達50.3%）、次いで母親（小学生が38.2%、中学生は27.3%）である。ここでは父親が相対的に低くなっている（小学生で11.9%、中学生が9.5%）。学校の先生がどちらも低い（小学生1.1%、中学生4.7%）のは、教師の忙しさゆえなのか、それともそのような甘えを許さないほどに権威的なのか。しかし、いずれにしても、困難な事態が学校において生じたときの子供達の心理的な支えとして機能できていないことがうかがえて、問題を感じさせる。

小学生も中学生でも友達が圧倒的多数を占めていることは上記の通りであるが、なかでも自分の所属する学校の友達の割合が小学生、中学生でかなり高く、友達同士お互いにどう思われているかを気にしあっている。それはこの時期に見られる彼らの同調性への志向という点から予想されることではある。彼らは仲間に入れられることを求めており、集団からはずれることを恐れるという一般的傾向を持っている。それゆえにこそ、この時期仲間集団から受け入れられないということが、もし起こったとすれば、彼らの集団適応が難しくなることを示唆している。調査の結果は、この意味で母や友人との関わりに問題を持つ者が、不応適生徒に幾分多く見られていることを示している。

③虎の威的意味

この関わりの意味はその人との関わりがあるということによって、その人に自己を同一視し、あるいはその人の行動を取り入れることによって自己拡大していく、そのような意味を持つと考えられたものである。

この意味で選ばれたのは小学生、中学生共にメディアを通して関わる人々が高い割合を示した。両親や友達は少ない。しかし、中学生では学校の上級生が比較的高い数値を示しており、とくに部活の上級生が単なる学校の上級生のほぼ2倍にのぼっている。これは彼らの学校生活の中で部活を通して関わる上級生が下級生にとって、部の活動の技術的なことも含めて憧れの対象になっていることを示している。学校の先生はあまり高くないことは注目される。

この意味での反応で特徴的なのは不明反応が多かったことである。この不明反応の多さは、このような意味を対人関係のなかで意識するのはこの年齢段階ではまだ幾分無理があるということをしめしているのかも知れない。

④共生的意味

対人的関わりのなかで見出すこの意味は、その人と共にあることを意識することによって満足感を抱いたり、その人のために尽くせるということ意識することによって自己の存在意義を確認するなどを通して、自分の生活に自信を持っていくというものである。

このような関わりの意味は小学生は肉親において見出すらしく家族に対してそう考えているものがある。なかでも祖父母、母が高い。しかし、中学生では母が目立つ位で他の人達にはそのような関わりの意味をあまり感じていないようである。小学生も中学生も単独では学校の友達ももっとも高くなっている。友達関係においてそのような関わりを意識しているわりには、「いじめ」などのさいに友達を庇うという行動があまり見られていない気がする。

この意味は比較的反応がばらついていて、中学生になるとその対象がそれ以前の家庭内の関わりから家庭外での関わりの中から選ばれるようになっている。

4. ま と め

登校拒否児童・生徒の診断に関して、今回われわれが開発したチェックリストについては、これまでの検証結果からもかなりの程度の信頼性が確保されたと考えている。

また、登校拒否傾向のある児童・生徒はだいたい次のような特徴があることが分かった。第一に登校拒否傾向の強い児童・生徒は他者への依存傾向が強い。他者とは実際には親特に母親である。

第二に、第一の他者への依存傾向と密接に関わっているが、登校拒否傾向の子供達は、過保護であると考えられる。「欲しい物は大体親に買ってもらえ」、「友達と遊ぶより母親と遊んでいるほうが好きだ」、と答えていることから親の過保護に因があるというのは間違いのない事実であろう。

しかしこの子供達の傾向は単に依存的で過保護であるというだけでよいのだろうか。これだけでは問題の捉え方が平板に過ぎるのではないかと考える。なぜなら登校拒否傾向の子供達は、学校に十分に適応している子供達よりも、「学校は嫌いではない」と答えているのである。これは、あるいはチェックリスト自体に問題があったことにもよるとは考えられる。しかし、既に述べたように、チェックリストの信頼性は確かめられている。となるとわれわれはこれをもっと別の意味で捉えるべきだと考える。登校拒否の構造を成している諸要因の中で、われわれがとくに強調したいのは、社会的能力としての他者と関わる力の未形成という問題である。今回の研究の過程でわれわれは数多くの登校拒否の児童・生徒に会い、話をした。そこで自分達の研究の仮説が正しかったことを確信した。それは登校拒否とか学校恐怖とかいう前に、彼らは既に人と交わったり、人とまじわったり、人と関わったりする力が不足している。言い換えれば他者と交わる経験が絶対的に不足していると言う印象を得たからである。子供達の全ての能力は、社会的に形成される。つまり、人と人との関わり、交わりによってつくられる。登校拒否傾向にある子供達は、そこが不足しているのでは

ないか、というのがわれわれの研究の大まかな仮説的前提であった。

一連の調査結果は、そうした仮説的前提の正しさを十分に実証している。登校拒否傾向にある子供達は重要な他者、意味ある他者が不在であり、それがもたらす人間的な意味空間の狭さは、本稿では十分に触れられなかったが、今回の調査研究によって確かめられた。かれらの意識空間の中に、生きた人間、他者が位置づいていないのである。その点において親の過保護、過干渉が問題になると考えられる。親の過保護、過干渉は子供と社会、子供と他者との関わりを極端に少なくしている。つまり「重要な他者」「影響力のある他者」「意味ある他者」が彼らの意識空間、価値空間の中に形成されていないのである。これをどうしていくかが登校拒否問題に対する一つのアプローチになりうるのではないかと考える。

5. 提言一「社会的オジ」の発掘と組織化の必要一

1) 肉親のオジと社会的オジの必要

以上、結果の概要を報告したが、これをもとに、登校拒否傾向のある児童・生徒あるいはもっと包括的に不登校児童・生徒に対する教育的なアプローチとしてどんな手だてが考えられるか述べてみたい。

それは、いわば「社会的オジ」とでもいうべき人物を出来るだけ多く発掘して、登校拒否児童・生徒を援助する人的ネットワークをつくることであると考ええる。

肉親のおじ・おば・いとこの必要性については、従来ほとんど注目されてはこなかった。しかしわれわれは次のような理由で、おじ・おば・いとこが登校拒否傾向のある児童・生徒の社会的、人間的関わり回復ないし形成という課題にとって大変に重要であると考ええる。それは肉親ではありながら、両親でもなく、かといって他人でもない存在である。彼らは登校拒否傾向のある、あるいは学校不適應の児童・生徒から見れば、家族と社会の間に位置している。登校拒否の児童・生徒との間で、つかず離れずの関係を維持できる。ある時は両親と同じ愛情をもって接することができるかと思えば、世の中の厳しさをも両親とは違った意味で教えてやれる存在である。われわれはこうしたオジの存在が、現在の青少年にとって、特に学校不適應の青少年にとって大変に重要な意義を持っていることを協調したいのである。では彼らの存在はどのように説明されるのであろうか。

始めに若干原則的なことを述べておきたい。家族の内部では両親は子供の社会化における重要な準拠者であるが、父親と子供、母親と子供の間には相補型（支配－服従、披露－見物、頼る－世話）というようにA、Bの行動が違って互いに支え合うような相互反応の連鎖と対称型（競争、ライバル、張り合いという形で捉えうる相互作用。Aの行為がBの行為を刺激して同種の行為に駆り立て、それがまたAにはねかえって同種の行為をさらに促進するというもの）の分裂生成（簡単に言えば、人間の様々の違いを生み出すプロセスを表す言葉としてG. ベイトソンが使った概念）が生じやすい。しかし母親と子供の間が密接になるにつれて、養育者としての母親とこれに依存する子供の間が相補的な相互作用のパターンは、頼られたからといって世話をするから相手は余計頼るという関係になりやすい。そして例えば男子にとって父親との関係は対称型であるはずなの

だが、父親との関係が希薄になるにつれて、家族内部で彼が結ぶ関係は専ら相補型の相互作用だけになる。これではストレスを増すだけだとベイトソンはいう。対称型と相補型とは互いに打ち消す関係であって、ストレスの増加を防止するのである。

しかしこの分裂生成の組合せは同一行為者の間でも存在する。例えば父と子供の間でも対称型と相補型の2つの関係が可能なのである。大事なことは、この2つの関係を「使い分けること」とか「切り替えること」だとベイトソンはいう。しかしこれは今日の家庭では難しい。結局一方だけの相互作用になる。これは関係をエスカレートさせる。

家族における相互作用システムの崩壊を未然に防ぐ役割を担うものが必要となる。それがオジの役割である。オジは相互作用のパターンを相補型にも対称型にも切り替えることが出来る存在なのである。つまりオジという存在は、家族間の分裂生成と昂進を防止するだけでなく、父親の役割を演じているかと思うと、母親の役割も果たせるというように、関係の「切り替え」が自在に行えるのであり、この中で子供はいわゆるメタ・コミュニケーションのレベルの関係読み取りの学習をすることが出来るのである。子供達の内相互作用パターンの「切り替え装置」を内在化させることにつながる。「暖かい家庭」と「冷たい世間」という関係は、前者が相補型、後者が対称型であるが、オジは家族と社会を切り替える操作をしようとする人物なのである。

しかしオジは、いわゆる肉親としてのオジに限らない。亀山佳明が指摘しているように、社会的には次の4つのオジの類型を考えることが出来る⁵⁾。前述のように、道具的（例えば、知識や技能や世間のことを教えるというような関係）と表出的（愛情表現によって子供を可愛がるというような関係）、対称的と相補的という2つの軸を交差させると、ここに4つのオジの類型が出来る。道具的-相補的、道具的-対称的、表出的-相補的、表出的-対称的という4類型である。

既に述べたように、肉親としてのオジは、登校拒否傾向のある児童・生徒への人間的かつ教育的な関わりが可能な人物である。しかしこれだけではないであろう。例えば、われわれが今回の研究の発展として現在企画している「青少年にとっての地域内の重要な他者」の予備調査の結果でも、地域の中には、社会的オジに相当する人物が少ないとは言うものの若干はいるのである。今回の調査では、例えば、「おまわりさん」は道具型-対称型、「近所の人」は表出型-相補型、「知り合いの医者や看護婦」は道具型（後者は表出型でもあるが）-対称型、「友達」などは一般には表出型-対称型と位置づけられる。「電話相談の人」はこれらの関係のいずれをも「切り替える」ことの出来る人物である。こうした4つのタイプの社会的オジを発掘し、子供達の周囲に彼らへの援助者として置いてやるのがいま最も必要なことなのではないだろうか。

2) 社会的オジの観点から見た教師、友人の役割の再構成

このようなオジの意義と役割は、決して肉親としての「おじ・おば・いとこ」に限られるものではない。このことは実は、教師や友達についても言えることなのである。教師は、基本的に知識・技能を教授する役割を持っているから「道具型」であり、しかし同時に子供達をそれ自体としてすることが求められるから「表出型」でもあるはずである。また子供と愛情をもって相互に愛情と信頼の関係を結ぶべきことが期待されるから「相補型」でもある。つまり原則的にはいづれの関係をも持っているはずなのである。そういった観点から教師の役割を再構成してみる必要があると考える。

同じことが友人についても言えることはいうまでもない。「胸襟を開く」「切磋琢磨」「友情」「助け合い」といった関係がなくなったといわれて久しい。オジの4つのタイプは、実は友達関係についても想定できるのである。

以上のように、学校不適應児童・生徒への教育的関わりを創り出すためには、肉親のおじ・おば・いとこを始めとして、教師、友人そして特に地域内の様々な人物を人的資源として組織することが不可欠なのである。

注

- 1) 高垣忠一郎「登校拒否とは何か—何が問題か—『教育：特集 登校拒否』 No.514 (1989), pp.6-15
- 2) 文部省『児童生徒の問題行動等の実態と文部省の施策について』（文部省初等中等教育局中学校課, 1990）
- 3) 中野良顕「登校拒否—分類と診断—」『生徒指導の理論と実践』（武藤孝典編）第9章,（放送大学教育振興会, 1991）, pp.80-81
- 4) 安達喜美子・菊池龍三郎・板垣圭一他 青年に影響を及ぼす人々とその意味
茨城大学教育学部教育研究所紀要 第20号（1988）, pp.25-41
- 5) 亀山佳明「子どもの社会化と準拠者—社会的おじの不在について〈子どもの社会学〉—」
柴野昌山編『教育社会学を学ぶ』（世界思想社, 1985）, pp.93-110